

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の立地と基本層序(第6図)

樋口西野末遺跡は、大山北麓から派生する扇状の台地東端にあり、南西から北東方向に向かってなだらかに傾斜する緩斜面地に位置しており、遺跡周辺の標高は約70mである。

周囲は水田及び畑地になっているが、遺跡周辺は昭和50年代に大規模な圃場整備が行われており、今年度調査区の西半分は礫層(F層)まで掘削され、さらに最大40cm程度の造成土で平坦にされていることが判明した。そのため、現況では遺跡が形成された当時の景観を窺い知る事ができないが、現在の農道付近が標高約70mと最も高く、そこからある程度凹凸をもちながら緩やかに南西側に傾斜していく緩斜面をなしていたものと推察される。今年度調査区の西側は、大きな谷が形成されていたと考えられ、今回の調査地の西側でその一部を確認した。

かろうじて当時の層序を残す部分は、調査区中央部分と農道下部分である。耕作土(A層)、造成土(B層)、旧耕作土(C層)以下は、上層から黒色土層(D層:クロボク層由来)、暗褐色土層(E層:漸移層)、黄褐色ローム混じりの礫層(F層)となっている。遺構検出面は、B・C層を除去した後のD～F層である。

平成21年度の確認調査Tr.17でSS1とされた箇所は遺構ではなく、本調査の結果、自然の谷地形の一部であると判断した。この西側谷部の埋土は、耕作土(A層)、造成土(B層)以下Ⅰ～Ⅵ層に分層できた。Ⅰ・Ⅱ層は、遺物を包含する黒色シルトで、Ⅲ層以下は遺物を包含しない。なお、西調査区際は、Ⅳ層以下は礫層(F層)となっているものと思われるが、湧水が著しく調査が困難となったことから、標高67.2m付近まで掘り下げた段階で調査を終了した。

第2節 遺跡の概要(第7図)

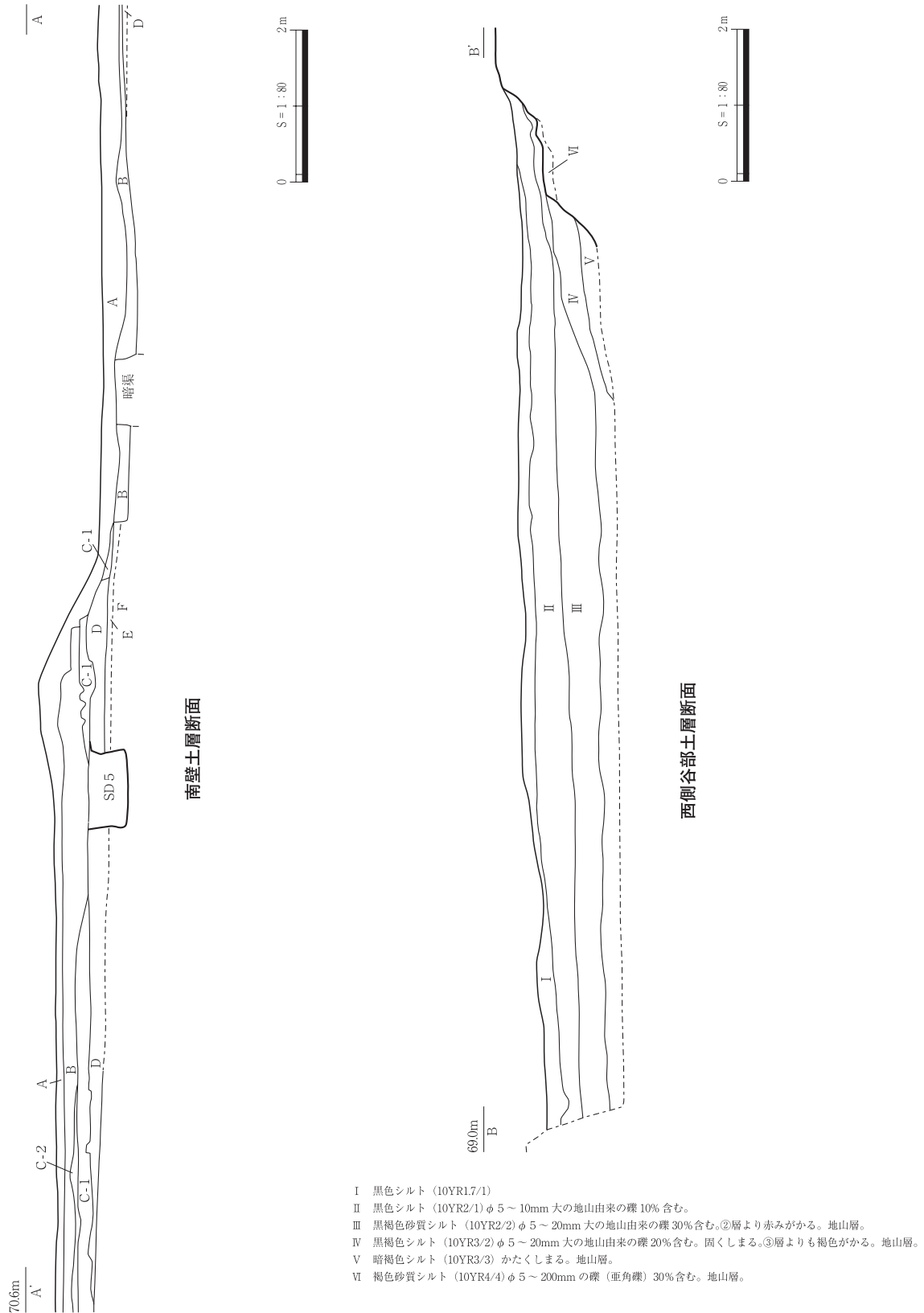
検出作業の結果、主に古代から中世にかけての遺構、遺物を検出した。

奈良・平安時代では、調査区中央やや東寄りでは大型の廂付掘立柱建物跡2棟(SB3・4)のほか、掘立柱建物跡2棟(SB5・6)、柵列2基(SA1・3)、ピット群を検出した。その西側には、調査区中央やや東寄りでは調査区を横断する区画溝SD5、SD5に平行するようにSD8を検出した。さらに西側で南東から北西方向に流れたと推定できる自然河川SD1を検出した。また、西側谷部付近では土坑3基(SK4～6)、溝1基(SD6)、焼土1箇所を検出した。この時期の遺物は、それぞれの遺構及び包含層(D層)から出土している。赤色塗彩された土師器のほか、墨書土器、転用硯、須恵器、灰釉陶器や炭化米がわずかに出土した。

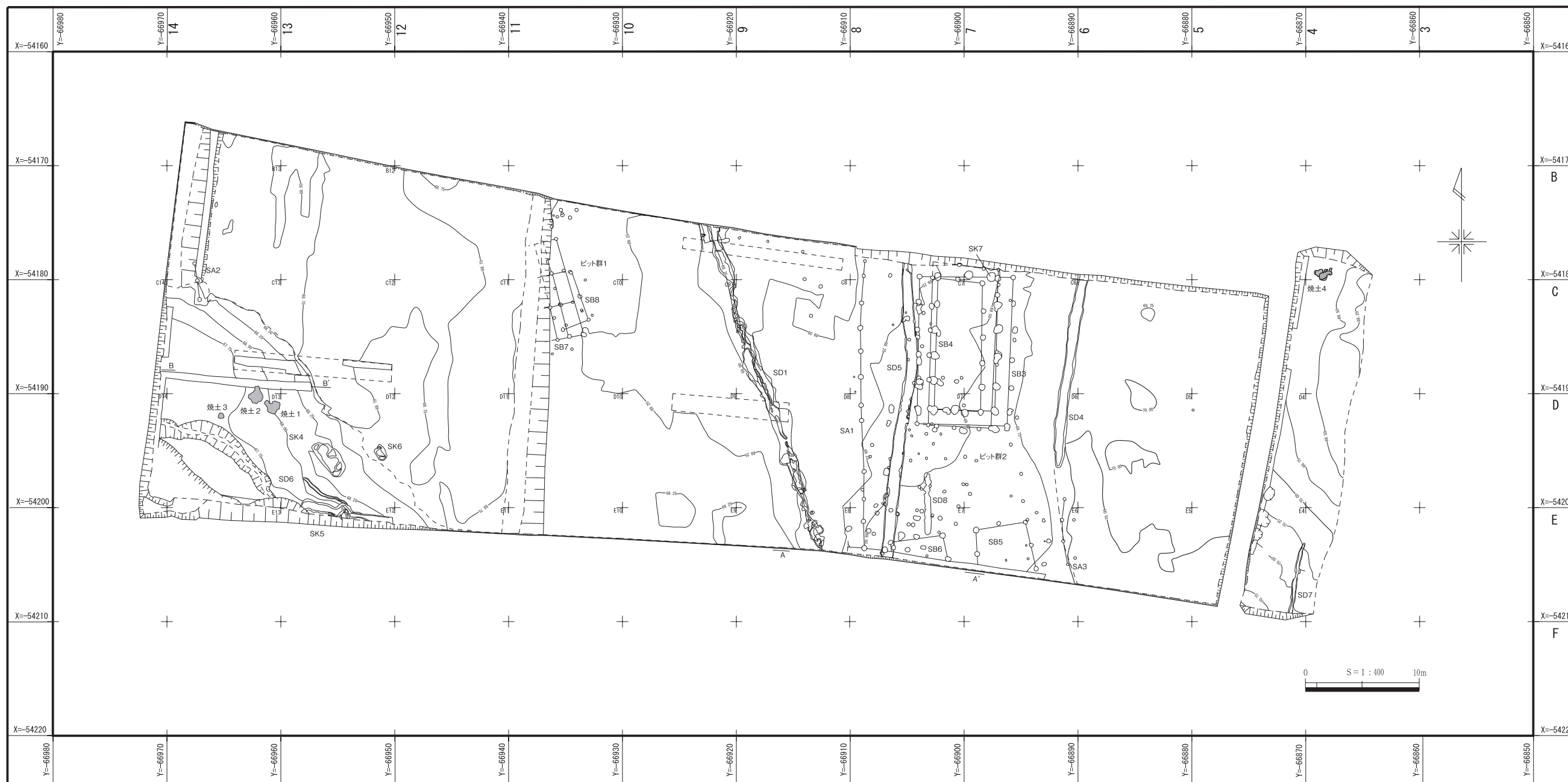
中世では、掘立柱建物跡2棟(SB7・8)、柵列1基(SA2)、溝1基(SD4)、ピット群を検出した。この時期の遺物は遺構に伴うものはほとんど無く、表土及び造成土中から瓦質土器、陶磁器が出土している。

この他出土遺物には、遺構外を中心に縄文土器や弥生土器が出土しており、検出した遺構より古い時期のものが含まれている。調査地周辺には、より古い時期の遺構が存在しているものとする。

第3章 調査の成果



第6図 調査区基本層序



第7図 樋口西野末遺跡遺構配置図

第3節 奈良・平安時代の調査成果

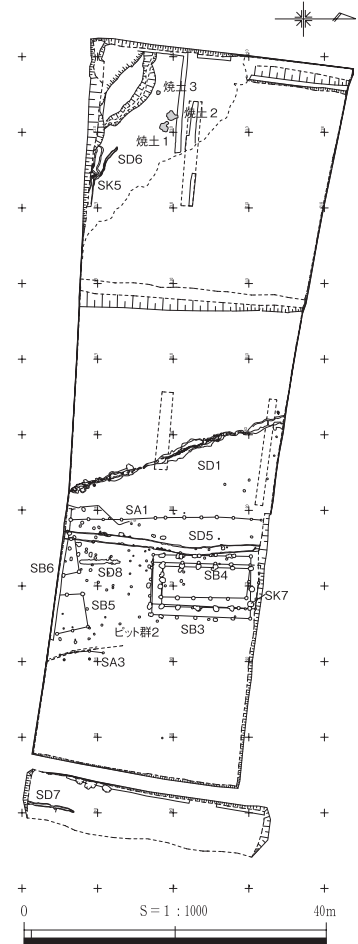
1 概要(第8図)

この時期の遺構は、掘立柱建物跡4棟、柵列2基、土坑2基、溝3基である。掘立柱建物跡は、出土遺物から平安時代中期(9世紀後半)のものと考えられることができる、大型で廂をもつもの2棟(SB3・4)、中型のもの2棟(SB5・6)が、やや長軸方向はずれながらも南北棟を基調として建てられていた。廂付の掘立柱建物跡は重複関係にあり、SB3→SB4の順で建て替わられており、規模が縮小している。また、大型掘立柱建物跡の南側には、倉庫と考えられるSB5・6がほぼ主軸方向を揃えて建てられていた。これらの建物群の西側は、柵列SA1によって区画されたものと推定できる。

また、建物群の西側には、建物の主軸とずれる自然河川(SD1)が、南東から北西に向かって流れていた。埋土中から、多量の土師器・須恵器類が出土した。

西側斜面部では、奈良時代の土坑SK5を検出した。SK5からは、須恵器がまとまって出土しており、建物群より時期が遡るものである。

出土遺物に赤色塗彩された土師器や墨書土器、転用硯等と伴に煮炊具である甕・移動式竈が見られること、建物が整然と配置され、大型掘立柱建物跡は四面廂をもつと推定できることから、これらの遺構は、何らかの官衙関連施設又は有力層の居宅であった可能性がある。



第8図 奈良・平安時代遺構配置

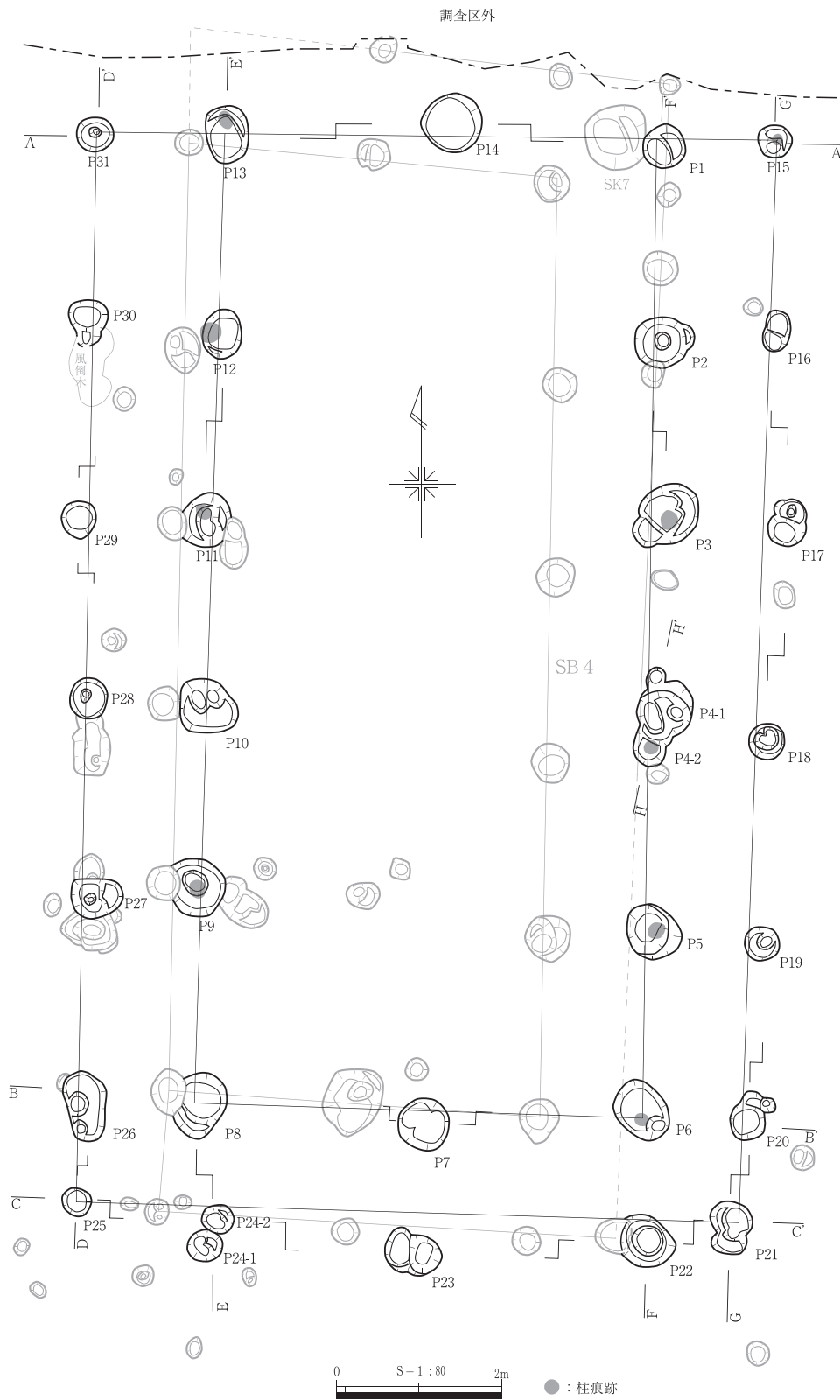
2 掘立柱建物跡

SB3(第9～11図、表1、PL.5～7・18、巻頭図版1)

調査区中央部北寄りのB6、B7、C6、C7、D6、D7グリットにまたがり、標高69.2～69.7mの緩斜面に立地する。黒色の遺物包含層(D層)を掘り下げ、漸移層(E層)の上面で柱穴を検出した。SD5およびSK7を切り、SB4に切られる。南側約9mには、主軸を異にするSB5、SB6があり、西側約5mには、柵列SA1がある。ほぼ同じ位置でSB4への建て替えが行われている。

建物本体は桁行5間(11.8m)、梁行2間(5.4m)の南北棟(N-1°-E)であり、北側妻側を除く三方の外周に柱穴列を伴う、総桁行6間(13.6m)、総梁行4間(8.2m)の三面廂建物であるが、南側の廂の幅を考慮すれば、調査区外に北側の廂を伴う、四面廂建物の可能性があるが、以降、内側の建物本体(身舎)の柱を入側柱、外周(廂)の柱を側柱と呼称する。

柱掘方の平面形は円形または不整形である。規模は、入側柱の平均値が、長径 67.62 ± 12.48 cm、短径 58.21 ± 8.48 cmであるが、特に長径60～80cm、短径50～70cmの範囲に集中分布する。側柱の平均値は長径 52.35 ± 12.79 cm、短径 44.00 ± 7.33 cmであり、長径40～60、短径30～50cmの範囲に集中分布する。入側柱に比べて側柱が小さく、約3分の2程度である。P4とP24はそれぞれ隣接した場所に掘り直



第9図 SB3(1)